

受験番号

国

語

(100点 60分)

(2025年度 A - 4)

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子の表紙の受験番号欄に受験番号を書いてください。  
複数の受験番号がある場合、受験票に記載されているメイン受験番号を記入してください。
- 3 この問題冊子は表紙を除き、17ページです。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、正しく記入してください。
  - ① 氏名欄 漢字氏名を記入してください。
  - ② 科目名欄 「国語」と記入してください。
  - ③ 受験番号欄 受験票に記載されているメイン受験番号を記入し、その下のマーク欄に、正しくマークしてください。
- 6 受験番号が正しく記入されていない場合は、採点されないことがあります。
- 7 解答は、解答用紙の解答マーク欄にマークしてください。  
例えば 

20
----

 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように20の解答マーク欄の③にマークしてください。  
(例) 

解答マーク欄												
20	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⊖	⊕
- 8 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 不正行為について
  - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
  - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
  - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。

国

語

(  
解答  
番号  
)

1

5

32

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～問10)に答えなさい。

1 五感<sup>1</sup>は歴史的産物である。

たとえば、現代では電車の走行音や発車音は騒音だと思われることが多い。だが、鉄道が誕生したばかりの一九世紀末の米国では、その音はモダンで科学技術発達の象徴としても捉えられていた。

目や耳、舌など身体のいわゆる感覚器官の働きが、時代によって必ずしも変化するわけではないし、個々人が感じ取る身体的刺激そのものには個人差があるかもしれない。だが、ある時・ある場所に生きる人々の間で共有される感覚体験やそれらに対する認識は、技術や経済、社会的要因によって変化しており、時代性を伴うものである。

一九八〇年代以降、欧米を中心に「感覚史」という研究分野が提唱され、感覚は研究対象の一つとして歴史学者や人類学者から注目を集め始めた。五感を **A** 的に捉えることは、人々が生きる環境がどのように変化してきたのか、そしてその環境の変化を人々がどのように認識し理解していたのかを考えることである。

つまり感覚の歴史は、存在論および認識論と深く関わる問題である。身体は物理的なモノとして在るだけでなく、文化的なものでもあり、その物理的・文化的構築物としての身体を通して人々は周辺環境を認識するのだ。

「景色」という語は、「景色を見る」のよう<sup>2</sup>にしばしば視覚と結び付けられるが、実際には、その場所を訪れる場合には、見るだけでなく、音や匂い、空気感のようなものを感じ取るし、写真など視覚メディアを通してその景色を見る場合であっても、その場の音や匂いなどが自然と想像されることもあるのではないだろうか。

仏教用語で「色<sup>しき</sup>」とは、広義には五感によって認識される物や現象、それらの総称という意味もある(狭義には視覚で認知される物を意味する)。ならば「景色」が五感で感じ取るもの<sup>3</sup>の<sup>2</sup>としても納得できるような気がする。五感で感じるものとしての(広義の)景色がいかに作り出され、また変化してきたのか、そしてその景色を人々がいかに感じ、理解していたのかを掘り起こすのが感覚史だといえるかもしれない。

では、人々の感覚体験・感覚世界はどのように変化してきたのだろうか。まず、産業化や工業化、都市化が急速に進んだ一九世紀末から二〇世紀初頭の米国を例に考えてみたい。<sup>(注)</sup> ヴァルター・ベンヤミンは、交通網の発達や工業化による社会変化を近代化による「ショック」体験だと捉えているが、まさにこの時期は、特に都市部における生活環境・生活様式の変化が人々にとって心身的「ショック」を与えるものだったともいえる。

それは普段の食生活——味覚体験——も例外ではない。一八七〇年代以降、大量生産時代をいち早く迎えた米国では、急速な工業化と市場の拡大に伴い、農業生産者や食品加工業者らは、効率性や標準化に重点を置いた生産の合理化を図ろうとした。

これにより、時季や産地に依らず色や味が規格化された食品の生産が必要となった。そして、トマトやリンゴなどの野菜や果物から、缶詰やマーガリンなど加工食品にいたるまで、どこで購入しても、同じ色、同じ味のものが作られ、食べられるようになったのだ。

たとえば米国フロリダ州のオレンジ。同州で栽培されていた一部の品種は、温暖な気候のため、皮の色がオレンジ色に変化しないまま、身だけが熟すことがある。フロリダの生産者らは、緑色の「完熟」オレンジは、たとえ中身が熟していても全国市場では売れないと考え、一九三〇年代初め、合成着色料を用いてオレンジの皮を着色するようになった。

つまり、消費者が期待する味、または消費者が求めているだろうと生産者が考<sup>え</sup>える味に「合致」する色を作ろうとしたのである。だが果物に着色をすることは自分たちをアザム<sup>a</sup>く行<sup>い</sup>うと考<sup>え</sup>えた消費者からは抗議がサットウ<sup>b</sup>した。

ここで興味深いのは、多くの消費者が、熟したオレンジの「自然な」色はオレンジ色であるべきだと考<sup>え</sup>ていたことである。この場合、実際には、緑色の方が熟したオレンジの「自然な（人工的に手を加えていない）」色であるにもかかわらずだ。

いつでも、どこでも、画一化された食品が市場に出回るようになったことで、多くの人々が共有する「あるべき」色という認識が次第に構築されていくと同時に、そうした認識は、翻<sup>4</sup>つて生産者らが予測可能で **B** 的な色を作るための更なる動機づけとなったといえる。

レオ・マルクスが「庭園の中の機械 (machine in the garden)」と呼んだように、農業の工業化・機械化が進んだことで、自然と人工の境界はヨウカイシ<sup>c</sup>、「自然」とは自然と人工のハイブリッドとして生み出されるようになったともいえるだろう。そしてオレンジのみならず、さまざまな食品の色、そして味が次第に標準化され、スーパーマーケットや食卓の景色が大きく変化したのである。

米国で食をめぐる視覚・味覚環境が大きく変化した二〇世紀初頭は、日本でも新たな感覚世界が生まれた時期である。それは、一九世紀末以降の資本主義社会の拡大が米国のそれとは違う意味を持ち、また異なる形で立ち現れたといえるかもしれない。

明治末から昭和初期は、新しいフードスケープ（食を取り巻く空間・環境）が誕生した時代である。コロケやトンカツなど当時では珍しかった洋風の料理が広まり始めるとともに、新たな外食文化も生まれた。一九〇二年（明治三五年）には調剤薬局としてソウギョウ<sup>d</sup>した資生堂薬局（現 資生堂）が、アイスクリームやソーダ水の製造・販売を行うソーダファウンテンを店内に開設し、後の「資生堂パーラー」に発展した。白木屋や三越など老舗デパートが食堂を開設したのもこの頃である。

一般庶民には依然として高嶺<sup>e</sup>の花ではあったものの、西洋料理がレストランで提供されたり、雑誌で取り上げられたりすることで、次第に多くの日本人が西洋的な料理を見たり、食べたりし、「近代化」を **C** 的に体験していたともいえるだろう。

また、東京や大阪などの都市部では、**D** 的都市空間が新たな感覚世界を生み出しもした。たとえば、江戸時代に呉服屋として始まったデパートは、従来の日本建築の店舗から西洋風のビルに建て替えられた。東京では、馬車や人力車に代わり、一八九〇年代に路面電車が開通。また大正以降、それまで

上流階級層に限られていた洋装が次第に一般にも広まり始め、和服姿の多かつた歩道には、最新の洋装と西洋風の化粧で身を固めた「モガ（モダンガール）」や「モボ（モダンボーイ）」が闊歩する姿も見られるようになる。こうした変化は、ファッションスタイルや建造物など視覚環境の変化のみならず、電車の走行音や海外の香水・化粧品匂いなど新たな感覚的景色が都市の一部となったことを意味していた。

このような新たな感覚体験は、さまざまな摩擦や価値観の衝突の中で生まれたものでもあった。電車の登場は、馬車や人力車事業にタズサわっていた人々から職を奪うことにもなり、実際、車夫からの反発を受けた。「モガ」や「モボ」らは、社会風紀を乱す存在としてそのイメージが広まりもした。激動する社会で、取り残されてしまった人々、その変化を享受しようとする人々、一方で抗おうとする人々の生が、当時の感覚世界から見えてくる。

大量生産時代の視覚の画一化にせよ、近代化による感覚体験の西洋化にせよ、これらは一見すると、資本主義システムの拡大により人間が「本来」持っていた豊かな感覚が単調になってしまったり、日本「本来」の感覚が **E** 的なるものに置き換わってしまったようにも見える。だが、歴史を通して人間の感覚は変化してきたのであり、「本質」や「本来あるべき」ものとは、連続と続く歴史の中で作られるものではないだろうか。

このことは、人々が感じ取る感覚、そしてそこから生まれるある種の価値観や認識は、社会的コンテクストの中で読み取る必要があることを意味している。たとえば、洋装や洋風建築のように現代の私たちには当たり前前に感じるものや景色は、二〇世紀初頭の日本人の多くには驚きや興奮、はたまた厭気（いやげ）を招くものだった。このように、政治的・経済的・社会的状況の中で作り出される感覚体験は、その時代・場所特有の意味を持つものなのである。

（久野愛「感じる歴史」による）

（注）ヴァルター・ベンヤミン 一八九二—一九四〇年。ドイツの哲学者、文芸批評家、思想家。

問1 傍線部 a～e のカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔解答番号〕

1

5

a アザムク

1

- ① ギメイを使う。
- ② 計画中止がヨギなくされた。
- ③ サギに用心する。
- ④ ケンギを晴らす。
- ⑤ ベンギをはかる。

b サツトウ

2

- ① 原稿をインサツする。
- ② ヒヨウサツを掲げる。
- ③ 被災地をシサツする。
- ④ 元気よくアイサツする。
- ⑤ 反対意見をモクサツする。

c ヨウカイ

3

- ① 水にトかす。
- ② 気力をヤシナう。
- ③ 木の葉がユれる。
- ④ てんぷらをアげる。
- ⑤ ワルツをオドル。

d ソウギョウ

4

- ① 無セツソウな政治家。
- ② ドクソウ的な研究。
- ③ 法案をキソウする。
- ④ ソウサク願いを出す。
- ⑤ ソウゴンな式典。

e タズサわつて

5

- ① 現場からチュウケイする。
- ② ケイチヨウに値する。
- ③ ケイセツの功。
- ④ 他社と業務テイケイする。
- ⑤ 住民をケイハツする。

問2

空欄

A

～

E

を補う語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じ番号を二度以上選んではいけません。)

〔解答番号〕

A 〓 6

B 〓 7

C 〓 8

D 〓 9

E 〓 10

〔

〕

① 感覚

② 西洋

③ 画一

④ 歴史

⑤ 近代

⑥ 社会

問3

傍線部「五感は歴史的産物である」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕

11

① 感覚器官の働きが時代によって必ずしも変化するわけではないが、技術や経済、社会的要因によって変化する場合があり、時代性を伴うものであるということ

② 個々人が感じ取る身体的刺激には個人差があるのと同じように、ある時・ある場所に生きる人々の間で共有される感覚体験は、時代によって異なるということ

③ 身体は物理的なモノであると同時に文化的なものでもあり、世界の人々の間で共有される感覚体験もまた文化的なものであるために、時代性を伴うということ

④ 感覚器官の働きは時代によって必ずしも変化するわけではないが、感覚は研究対象の一つとして歴史学者や人類学者たちから注目を集め始めていくということ

⑤ 身体的刺激には個人差があっても、ある地域に生きる人々の間で共有される感覚体験およびその認識というものがああり、それらは時代と共に変化するということ

問4 傍線部2「写真など視覚メディア……想像される」とありますが、その具体例として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕  
12

- ① 映画館のスクリーンに映し出されたヒマラヤ山脈を見て圧倒された。
- ② 油絵の風景画を見ると、絵の具の匂いがかすかに感じられた。
- ③ タイの雑踏を写した写真を見ると、街の喧騒が伝わってきた。
- ④ 富士山を背景にした知人の遺影を見て、彼の往時の姿を思い出した。
- ⑤ 小説の主人公がレモンをかじる情景を想像すると、思わず唾が出た。

問5 傍線部3「人々の感覚体験……米国を例に考えてみたい」とありますが、筆者はアメリカ人の感覚体験がどのように変化したと述べていますか。その

説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号〕

13

- ① いち早く大量生産時代を迎えた米国では、生産の合理化が図られた一方で、たとえばオレンジの生産者が緑色のオレンジに合成着色料を用いて着色したように、自然と人工のハイブリッドが生み出された。
- ② いち早く大量生産時代を迎えた米国では、効率性や標準化に重点を置いた生産の合理化を図った結果、食品の色や味が標準化され、それに伴い、食品に対する消費者の視覚や味覚の画一化が進んだ。
- ③ いち早く大量生産時代を迎えた米国では、生活環境・生活様式の変化が人々に心身的「ショック」を与え、食品の味や色についても、人々の嗜好に合ったものが全国画的に提供されるようになった。
- ④ いち早く大量生産時代を迎えた米国では、急速な工業化と市場の拡大が進む中、農業生産者や食品加工業者は消費者の抗議を受け入れる形で、「庭園の中の機械」とも呼ばれる農業の工業化・機械化を進めた。
- ⑤ いち早く大量生産時代を迎えた米国では、トマトやキュウリから加工食品にいたるまで、どこで購入しても、同じ色、同じ味のものが作られたために、人々はこのような画一化に抗議するようになった。

問 6 傍線部 4 「翻って」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 14〕

- ① 結果的には
- ② その一方で
- ③ 敢えて言えば
- ④ 言い換えると
- ⑤ その上さらに

問 7 傍線部 5 「日本でも新たな感覚世界が生まれた」とありますが、「新たな感覚世界」の具体例として誤っているものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 15〕

- ① 路面電車の騒音
- ② 洋風の料理の味
- ③ 西洋風のビルの外観
- ④ 海外の香水・化粧品の匂い
- ⑤ 「モガ」や「モボ」のイメージ

問 8 傍線部 6 「老舗」は二字で「しにせ」と訓読みします。これと同じく熟字訓で読む熟語を、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 16〕

- ① 市場
- ② 缶詰
- ③ 和服
- ④ 果物
- ⑤ 緑色

問9

傍線部7「本質」や「本来あるべき」ものとは、連続と続く歴史の中で作られるものではないだろうか」とありますが、ここからどのような考え方が読み取れますか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 17〕

- ① 米国の画一化にせよ日本の西洋化にせよ、人間の感覚は歴史を通して変化してきたということが、「本質」であり「本来あるべき」状態である。
- ② 「本質」的な感覚や「本来あるべき」感覚といったものは歴史を超えて存在する絶対的なものではなく、理想として仮構されたものにすぎない。
- ③ 感覚体験における「本質」や「本来あるべき」ものは、米国における視覚の画一化や、日本における感覚体験の西洋化などの形で現れる。
- ④ 感覚器官の働きは時代によって変化し、また感覚体験には個人差がある以上、感覚の「本質」や「本来あるべき」ものなど虚構にすぎない。
- ⑤ 「本質」的な感覚や「本来あるべき」感覚というものは、途切れなく永久に続く歴史の中で少しずつ醸成されていくものである。

問10

本文を読んだA～E五人の生徒が感想を述べ合いました。このうち筆者の考えとは異なる意見を述べたのは誰ですか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 18〕

- ① A 感覚体験や感覚世界というのは一つの社会の中で生きる人々に共有される文化的なものであると、筆者は主張しているよね。
- ② B そうだね。それと同時に、それらは時代と共に変化していくのであり、「感覚史」という学問分野が成り立つとも言ってるね。
- ③ C そのような感覚体験・感覚世界の変化の例として、大量生産時代における視覚の画一化と、感覚体験の西洋化があげられている。
- ④ D 後者の例でいうと、デパートや電車などが日本に誕生した当時の人々は、現代人とは違い、新鮮な感覚体験をしたにちがいない。
- ⑤ E このような時代による感覚体験の違いは、人々が持っている価値観や常識が彼らの感覚に影響を与えることで生じるのだよ。

第2問 次のⅠ・Ⅱの文章はいずれも戸谷洋志著『SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ』の一節です。これらを読んで、後の問い(問1～問10)に答えなさい。

Ⅰ 少し前のことですが、私はネットで腕時計を買いました。腕時計なんて、実際に腕につけてみて買うかどうかを判断したほうがいいに決まっているのですが、その時計はオンラインショップでしか売っていませんでした。しかたなく、ネットで死ぬほど検索して、クチコミも調べあげ、ようやく買うことを決断しました。その時計は今でも私のよき相棒として腕に巻かれています。それはいいのですが、実はその少し後から、私のブラウザーの検索画面にはずっとその時計の広告が表示されるようになってしまいました。もう買ってしまった後なので、今さら広告を出されても意味はないのですが、今でも時々その広告を見かけます。正直、じゃまでしかありません。

なぜ、その広告が表示されるのかというと、検索エンジンが履歴を学習して、私が欲しいであろう情報を優先的に画面に表示するからです。つまり、私のこれまでの検索キーワードに基づいて、私がこれから検索すると予測される情報を、優先的に表示している、ということです。

これを、アルゴリズムによる最適化といいます。アルゴリズムとは、コンピューターで行われる計算や処理の手順のことです。「私」が検索サイトの画面を開くと、アルゴリズムが自動的に動作し、「私」のネットでの行動履歴に合った——つまり、私に「最適化」された広告が表示されるしくみになっているわけです。

実は、これと同様のシステムが、SNSにもとり入れられています。「私」がSNS上で閲覧するコンテンツ、「私」がSNS上で出会うアカウントは、そもそも「私」の趣味や関心に合わせて表示されています。しかし、そうであるとする、「私」にはもともと予測できないような出来事、つまり偶然の出会いというものは、SNS上では起こらなくなってしまいうように思います。

Ⅱ たとえば、本を買うときのことを想像してみましょう。私はよく書店で本を買います。リアル<sup>2</sup>の書店の魅力は、なんといっても、実際に陳列されている無数の本を見ることができ、棚に並んでいる本を手にとって、ぱらぱらと試し読みできることです。私は書店に行くと、ついもともと買う予定ではなかった本まで買ってしまうのですが、それは予期しなかった本との出会いが起こるからです。書店を気ままにぶらぶらするのは、最高の休日の過ごし方です。

私事にはなりますが、私はハンス・ヨナスという哲学者を研究しています。実は、私がヨナスと出会ったきっかけは、書店でたまたま彼の本を手にとったことでした。そのとき、哲学の棚に「注目の新刊」としてヨナスの本が並んでおり、それをぱらぱらとめくったところ、「これだ！」と直感し、大きな衝撃を受けました。今でもあのときの気分を鮮明に思い出すことができます。

私はよく、もしもあのとき、あの書店に行かなかつたら、自分はどうなっていたらと想像します。あのとき、あの書店に行かなければ、私がヨナスを知る機会は無かつたかもしれないし、研究者にすらならなかつた可能性もあります。当時は教職課程をとっていたので、もしかしたら高校の教師になっていたかもしれない。きっとその人生も素敵だつたと思います。しかし、いずれにしても、その書店でその本と偶然出会つたことが、私の人生を大きく変えたことは否めません。

しかし、アルゴリズムによる最適化は、本との出会いをまったくちがうものにします。(イ) <sup>(注)</sup> Amazon のおすすりに基づいて本を買うとき、私たちはもともと自分が好きな可能性の高いものを推薦され、そのなかから選んで買うということになります。当然、それが「私」にとつて「ハズレ」である可能性は低くなりますが、それは同時に、人生を大きく変えるような本との出会いがなくなってしまう、ということでもあるでしょう。(ロ) そうした本は、それまでの「私」が選びそうな本とは異なる本であり、それゆえにまったく新しいものを「私」にもたらす本だと考えられるからです。

(1) アルゴリズムに従つて情報に接しているとき、その情報が「私」を大きく変えることはほぼありません。「私」は、自分からもとから関心のあること、好きなこと、知りたいと思つていただけ、出会うことになるからです。そうではない情報は、「私」にとつて「ハズレ」となるリスクがあり、時間とお金の無駄と感ぜられるかもしれません。そうした無駄を回避したい、という欲求に、アルゴリズムによる最適化は応えようとしているのです。

少し硬い言い方してみるなら、「アルゴリズムは偶然性を排除する」と言うことができるでしょう。アルゴリズムは、与えられたデータに基づいて、ある一定のシステムに従つて、「私」に情報を提示してきます。「私」が接する情報は、一定の理由があつて選ばれているのであり、理由なくたまたままぎれこんでしまった、というような偶然の情報は、「私」の見る画面のなかには存在しないのです。

(2) たとえば、「私」がバトル系少年漫画をネットで大量に購入したとしましょう。(ハ) Amazon のアルゴリズムは、「この人はバトル系少年漫画の大ファンであり、最新のバトル系少年漫画を目の前にしたら、きっとそれを買つてしまうだろう」というふうな「私」を理解し、「あなたへのおすすめ」を並べてきます。この画面のなかには、偶然性は存在しません。

偶然性とは、「その出来事が起こらないこともありえたのに、たまたま起こつた」ということを意味しています。たとえば、リアルな書店での本との出会いはその典型です。ある日、「私」が書店で、ある本と遭遇したとします。(ニ) その遭遇はもしかしたら起こらなかつたかもしれませんが、もし、書店員がその本を別の場所に移動していたら、もし、「私」がその本の置いてあるフロアを通りかからなかつたら、「私」は決してその本と出会わなかつたでしょう。

(3) SNS で、「私」にあるユーザーが「知り合いかも」とレコメンドされるとき、その推薦は、SNS での行動履歴から読みとることのできる「私」の友人関係や趣味、関心のありそうな分野を根拠に行われます。アルゴリズムは、「私」がそのユーザーに関心を持つにちがいないと考えるのであり、そのようなアルゴリズムの推測の範囲のなかで、SNS における他者とのつながりは広がっていきます。

エ  
それに対して、現実の世界における出会いには、そうしたアルゴリズムは働いていません。たまたま学校で委員会が一緒になった、たまたま道に迷ってしまつて道を聞こうと声をかけた、たまたまバーでお酒を飲んでいたら隣にいた……これらはすべて偶然の出会いです。「私」とその人は、そのとき、まったく別の場所にいた可能性も十分にあるのであり、それにもかかわらず、偶然、出会ってしまったのです。

アルゴリズムの働かない、偶然性に満ちた世界のなかで何かを選択することは、常に不確定です。選択をまちがえて「ハズレ」を引いてしまうかもしれません。その意味において、アルゴリズムの外側で何かを選択することは常に賭けである、と言うことができます。

また、一般に、何かを選択するとき、「私」にはそれを「選ばない」という可能性も開かれています。たとえば書店である本を見かけたとき、それを手にとらないこともできるはずですが、それでも「なんだか気になるから」と、その本を手にとるとき、「私」にはある種の責任の感覚が生じます。(ホ)、  
「誰にも何も言われずに、自分の意志でその本を選んだのだ」という確信を持つことができるのです。

(4) 偶然性を排除するアルゴリズムは、こうした「賭け」と「責任」をも排除します。一方では、アルゴリズムに提案される選択肢だけが選ばれます。それは「賭け」の要素の排除であり、「絶対にハズレを引きたくない」という「私」の欲求を満たすものです。また他方では、「私」がその選択肢のなかから何かを選ぶとき、そこには、「私」が最初から主体的に、自分の責任で選んだわけではないのだ、いわば「選ばされた」のだという意識が生じるのではないのでしょうか。

(5) アルゴリズムに基づかない現実の出会いには「ハズレ」もありえます。たとえば偶然になかよくなった人が、実はとても性格が悪かったと後でわかり、話しかけたことを後悔することもあるでしょう。あるいはそのような事態を警戒して、そもそも知らない人とは会話をしない、という方針を採用人もいるはずですが。しかし、書店における本がそうであるように、「賭け」と「責任」を伴う偶然の出会いこそが、「私」に新しい経験をもたらしてくれるのではないのでしょうか。偶然出会った人との関係性から、それまでの「私」には考えることもできなかったようなまったく新しい可能性が開かれることだって、少なくないのです。

(戸谷洋志『SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ』による)

## 文章I

(注1) ブラウザー⇨インターネットを介してウェブサイトを閲覧するためのソフトウェア。

(注2) SNS⇨「ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス」の略。登録した利用者同士が交流できるウェブサイトの会員制サービス。LINEやインスタグラムなど。

(注3) アカウント⇨パソコンやスマホ、インターネット上のサービスなどを利用する際に必要な権利や個人認証情報。

文章Ⅱ

(注) Amazon II アメリカのシアトルに本社地を構えるウェブ通販サービス。

問1 空欄(イ)～(ホ)を補うのに最も適当な語を、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。(同じ番号を二度以上選んではいけません。)[解答番号 イ II 19、ロ II 20、ハ II 21、ニ II 22、ホ II 23]

- ① なぜなら      ② つまり      ③ たとえば      ④ すると      ⑤ しかし      ⑥ だから

問2 傍線部1「偶然の出会い」について、筆者はどのように考えていますか。文章Ⅱの内容もふまえた説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。[解答番号 24]

- ① 偶然の出会いは、アルゴリズムによる最適化を通して、「私」にとって「ハズレ」のない新しい経験をもたらしてくれる。  
② 偶然の出会いは、たとえ「私」の趣味や関心事とは合わないものとの出会いであっても、その趣味や関心事をより深めてくれる。  
③ 偶然の出会いは、「私」とは趣味や関心事の異なる他者と知り合う機会を作り出し、それを通じて自分の可能性を広げてくれる。  
④ 偶然の出会いは、たとえ「私」の意に反して「ハズレ」を引いてしまったとしても、日常生活に変化やうるおいを与えてくれる。  
⑤ 偶然の出会いは、データに基づいたアルゴリズムに従っていないために、「私」の経験や人生を最適化する可能性を開いてくれる。

問3 傍線部2「リアルな書店の魅力」として筆者が最も強調していることは何ですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 25〕

- ① 棚に並んでいる本を実際に手にとって、ぱらぱらと試し読みができること
- ② 書店の中をぶらぶらしながら、最高の休日をご過ごすことができること
- ③ 陳列されている無数の本を見たり、手に取ったりすることができること
- ④ 「私」が興味や関心のある分野の本へと、「私」を自然と導いてくれること
- ⑤ アルゴリズムによって選ばれたものではない本と、たまたま出会えること

問4 傍線部ア～オの「それ」の指示内容として誤っているものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 26〕

- ① ア＝書店で買うつもりではなかった本まで買ってしまうこと
- ② イ＝Amazonが推薦するものの中から選んで本を買うこと
- ③ ウ＝「私」にとって「ハズレ」である可能性が低くなること
- ④ エ＝SNSにおける他者とのつながり
- ⑤ オ＝アルゴリズムに提案される選択肢だけが選ばれること

問5 傍線部3「『ハズレ』」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕

27

- ① 自分の好みや趣味に合わないこと
- ② 人生に変化をもたらさないこと
- ③ 偶然性に左右されてしまうこと
- ④ 書店に出かけなければならないこと
- ⑤ まったく新しいものをもたらさないこと

問6 傍線部4「偶然性」と対照的に用いられている本文中の語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

〔解答番号〕

28

- ① 優先的
- ② 最適化
- ③ 主体的
- ④ ハズレ
- ⑤ 可能性

問7 傍線部5「いわば『選ばされた』の」という意識が生じる」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号〕

29

- ① アルゴリズムは選択肢における偶然性を排除してくれる代わりに、「私」に「賭け」や「責任」を押しつけてくるから。
- ② アルゴリズムに提案された選択肢の中から選ぶとはいえず、選択を間違えて「ハズレ」を引いてしまうことがあるから。
- ③ いくつかの選択肢の中から選ぶとはいえず、その選択肢はすでにアルゴリズムによって自動的に提案されたものだから。
- ④ アルゴリズムに提案された選択肢には「ハズレ」がなく、それらはいずれも、まさに「私」が求めていたものだから。
- ⑤ 「私」が選択したものは最初から主体的に、自分の責任で選んだわけではなく、たまたま選んでしまったものだから。

問8 本文から次の文が抜け落ちています。どこに戻すのが最も適当ですか。後群の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 30〕

このことは人間関係においても同様です。

- ① ( 1 )      ② ( 2 )      ③ ( 3 )      ④ ( 4 )      ⑤ ( 5 )

問9 文章Ⅱの内容と合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号 31〕

- ① アルゴリズムによる最適化は、SNSで他者とながるときにも自動的に働いている。  
② アルゴリズムが提案した選択肢から選ぶ場合であっても、選択を間違えることはありうる。  
③ 現実の世界での偶然の出会いにはアルゴリズムは働いておらず、「ハズレ」もありうる。  
④ リアルの書店では、自分の人生を大きく変えるような本と出会うことが起こりうる。  
⑤ アルゴリズムの働かない世界における選択は「賭け」であり、「責任」の感覚が生じる。

問10 文章Ⅰと文章Ⅱの関連について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。〔解答番号

32

〕

① 文章Ⅰはアルゴリズムによる最適化では偶然の出会いが起こらないと主張しているのに対して、文章Ⅱはその理由をアルゴリズムの限界として指摘し、さらに偶然性に満ちた現実世界でこそ新しい可能性が開かれると結論づけている。

② 文章Ⅰはアルゴリズムによる最適化では偶然の出会いが起こらないと主張しているのに対して、文章Ⅱは本を買うときや人と出会うときを例にあげながら、偶然の出会いにも「ハズレ」があり、一概には肯定できないと意見を述べている。

③ 文章Ⅰはアルゴリズムによる最適化の問題点を示唆するのにとどめているのに対して、文章Ⅱは「ハズレ」という観点、さらには「賭け」と「責任」という観点から、その問題点およびその解決策についてわかりやすく論じている。

④ 文章Ⅰはアルゴリズムによる最適化の問題点を示唆するのにとどめているのに対して、文章Ⅱは本を買うときや人と出会うときを例にあげながら、アルゴリズムを用いても現実世界の偶然性を排除するのは不可能だと結論づけている。

⑤ 文章Ⅰはアルゴリズムによる最適化の問題点を示唆するのにとどめているのに対して、文章Ⅱはその問題点を「偶然性」という語をキーワードにして説明し、さらにアルゴリズムの働かない現実世界の可能性にまで言及している。